

平成二十七年 度

第一回 女子美術大学付属中学校入学試験

国語

〔問題用紙〕

(五〇分)

受験番号
氏名

解答はすべて別紙解答用紙の解答欄に記入すること。

(試験問題を持ち帰ってはならない)

—

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

長袖の冬服を着ると、まだ汗ばむような気がする。それでも、季節は、衣替えの秋になっていた。

深雪は、深く息をすいこんでみた。十月の朝の空気が気持ちよく胸の奥にしみる。

「おはよう」

後ろから声をかけられた。藤平菜里が立っていた。肩の辺りまで伸びた髪を、今日は二つにわけて赤いゴムでとめて
いる。

「おはよう、昨日はごきうさま」

深雪は、菜里の髪の毛を軽くひっぱった。昨日はおそくまでかかって、文化祭の準備をしていたのだ。夏休みに深雪、菜里、駒木千博、荻野真吾の四人でやった社会の宿題、「わたしたちの街、その歴史と生活」が、なかなかの出来だったのだ。年表を作って、各時代ごとにイラストを入れた。十二単を着た平安朝の女人や袴姿の武士、二十以上のイラストを菜里は一人で担当し、美しく仕上げた。その年表を社会科担当で担任の生田先生が気に入って、文化祭の展示会場にはり出すことに決めた。そうなれば、もう少し見やすいようにと、字を大きくしたり、イラストの色を塗り直したり、四人は、昨日おそくまでがんばった。生田先生が差し入れてくれたパンを頬張りながら真吾がしみじみした口調で「なんか、充実した時間だなあ」と言った。

「おまえは、何か食ってたらいつでも充実してんだろ」

と、千博がからかう。パンを口にくわえた真吾の顔がおかしくて、深雪も菜里も、声を出して笑ってしまった。この数ヵ月で、四人はずい分、親しくなったと思う。思いのほか、菜里がよく笑うことも、千博が冗談を言うことも、軽薄で無責任だと思っていた真吾に汚れ仕事をいとわない真摯さがあることも知った。驚きだった。楽しくもあった。その楽しさにひっぱられるようにして、この数ヵ月が過ぎたような気がする。その総仕上げとして昨日、四人は年表を作り上げた。文化祭が終わったら四等分して、記念に持っておこうと、真吾がティアンした。あんがい真吾もロマンチスト

なのかもしれない。

「藤平、江戸時代のとこに、おれに似たかつこいい忍者、描いてくれよ。おれ、その時代をもらうから」

「荻野くんの忍者、えー、描けるかな」

「栞里、アンパンくわえてる絵にしろよ」

「あつ千博くんに賛成。絶対そっくりになるよ、栞里ちゃん」

昨日かわした会話を思い出す。

「深雪、何がおかしいの」

「え？ あはっ、やだ、思い出し笑いしてた……あれ？」

教室から人影が出てきた。女の子らしい。非常階段の方に 1 と走り去っていった。昨日完成した年表を、壁に貼ってみるつもりで、今朝はいつもより三十分以上早く登校していた。学校全体が、まだ、活動開始前の静けさの中にあった。こんな時間に、誰が教室に……ちくつと胸の奥が痛んだ。いやな予感がした。予感、いつもいやな時だけ当たるのだ。足が速まる。深雪は、ほとんど駆け込むようにして、教室に入った。

「あ……」

息がつまった。

「ひどい……」

栞里の聲がかすれて、ふるえる。昨日、栞里の机の中に入れておいた年表が引きずり出され、びりびりに破かれている。床に散った紙くずは、朝の光の中で白くういて見えた。深雪を押しつけ、栞里が前にでる。しゃがみこむと、無言で拾い始めた。泣くまいと唇をかみしめている。深雪は、目をそらし、非常階段まで走った。驚きより悲しみより、今、身体の中に怒りが渦巻いている。青くペンキを塗られた非常階段には、だれの姿もない。ゆっくり降りてみる。四段目に小さな髪どめ用のピンが落ちていた。先にリングの飾りがある。非常階段の手すりをつかみ、深雪は深呼吸をくりかえした。朝の空気がひんやりとしみた。さっきまでの、心地よさはどこにもなかった。

生田先生は、一時間目をつぶしてホームルームにあてた。

「犯人探しではなく、なぜ、こんなことになったのか、思い当たることのある者は、言ってくれないか」

先生の言葉が終わらないうちに真吾が立ち上がり、こぶしで机をたたいた。

「ふざけんなよ。この中に犯人がいるなら、おれ、絶対に許さないからな」

普段、明るくひょうきんな真吾の本気に怒る顔は、ひるむほど迫力があつた。千博が、静かに深いため息をもらす。

栞里は、うつむいていた。深雪は、後ろをふりかえり、何もはっていない壁を見た。

あんなに楽しかったのになぜ……

教室にいる誰も何も言わない。時間だけが過ぎていった。

放課後、深雪はだまって教室を出た。図書室に行く。一番奥の棚と棚との間の通路に、栗坂美希が立っていた。

「なつなによ綾部さん……こんなところに呼び出して、あたし、塾が」

「どうしてあんなことしたの？」

自分でもきつい声だと思った。美希のくちびるは、はつきりとわかるほど、震えていた。深雪は、今朝拾ったピンをさした。

「これ、栗坂さん昨日つけてたよね。今朝逃げる時落としたでしょ」

「そんな……」

「あたし、見たのよ。栗坂さんが今朝早く、教室から出て行くところ」

嘘だった。今朝の人影は遠すぎて女子であること以外、何もわからなかったのだ。でも、美希は手で顔を覆いしやがみこんで泣き出した。

泣かないでよ、泣いてごまかしたりしないでよ。栞里ちゃんは泣かなかつたよ。唇かみしめて、泣かなかつたよ。泣いて終わりになるようなことじゃないもの。それで許されることじゃないもの。

心の中で叫ぶ。こぶしを握り締めると手のひらが汗ばんでいた。ふいに美希が顔をあげる。立ち上がり一つ、ゆっくりと息をはいた。かすれた小さな声で、話し始めた。

「あたし、真吾くんのこと好きだった……小学校の頃からずっと……告白しようと思ってた……でも、断られるのが怖くてできなくて……なのに、綾部さんたち、すごく楽しそうに話して……真吾くん、綾部さんのこと好きみたいで……」

「ばかなこと言わないでよ」

「ばかじゃない。あたしわかるもの。真吾くん綾部さんばかり見てるじゃない。あたし、悔しくて……」

「それで、あんなことしたわけ」

美希が、うなずく。

「あたし……最初からあんなことするつもりじゃなかった……あたし、ガッショウ部だから、文化祭のための朝練があつて、早く来たの……教室入ったら誰もいなくて、藤平さんの机からあの年表がはみ出していて……そしたら、綾部さんと真吾くんが笑いながら話したりしているの思い出して……頭の中がカッと熱くなつて、^⑧気がついたら……」

美希は、あごをあげて深雪を真正面から見た。

「ひどいことしたつて思っている。今日一日、藤平さんの顔、見られなかった。自分で自分が厭だつたもの」

「じゃ、今、あやまつて」

茉里の声がした。ふりむくと深雪が背にしていた棚の陰から茉里がアラワれた。茉里は美希に近づいた。

「今、ちゃんとあやまつてよ」

美希の肩が震え始めた。

「ごめんなさい、藤平さん、ごめん」

頭を下げそれだけ言つと、美希は、図書館を走り出て行つた。

「茉里ちゃん、なんで、ここが」

「わかるよ。深雪のようすが変だつたもの。なにか隠してるみたいで、さつさと教室出て行くし、あと、つけたの。みんないっしょ。ねっ」

茉里の後ろから千博と真吾がのぞいた。

「おれたちマジ忍者みたいだな」

真吾がべろりと舌を出す。千博は真面目な顔で言つた。

「綾部、おれたちのことなんだからさ、相談ぐらいしてくれよな」

茉里がうなずいた。

「そうだよ。だまつてないで、ちゃんと相談してよ、深雪」

茉里に責められたのは、初めてだ。深雪は、はいと返事をした。

「で、どうすんの。栗坂のこと、先生に言つちやうわけ？」

真吾が、ふつと息をはいた。

「言つてもしょうがないんじゃない。年表元にもどるわけじゃないし……悔しいけど……言いつけたりしたら、なんかすごくいやな気持ちになるし……そしたら、せつかくの楽しかったことまで無くなるみたいで」

茉里が、自分の足先を見ながら、2しゃべる。

「なっ、また作んない」

真吾が、いつもの陽気な口調で言つた。

「宿題とか文化祭のためじゃなくて、おれたちのために、すげえの作ろうぜ。年表作成第二弾」

「それを四等分して持つとくんだな。もち、真吾の忍者姿イラストつきで」

千博がそう言つて、くすりと笑う。^⑨うつむいていた茉里が、顔をあげた。

「綾部は？ もちOKだよな。よっしゃ、またがんばろうぜ」

真吾がガッツポーズをきめた。深雪は目を細め、三人の顔を見た。破られた年表を見つけた時、終わったと思つた。楽しかった思い出もびりびりに破られてしまった、そんな気がした。怒りがあつた。今まで美希を問い詰めて、怒りをぶつけることだけを考えていたような気がする。茉里のように、美希を許すことも、真吾のようにもう一度、作り直すことも、考えもしなかった。かつこいいな。ふいにそう感じた。

^⑩「みんな、かつこいい」

ふつとつぶやいていた。真吾がえつと聞き返した。

「なに？ 綾部、今、真吾くんかつこいいとか言わなかった？」

「まさか。言うわけないでしょ」

深雪は、笑いながらそう言つて、真吾から目をそらした。

『真吾くん綾部さんのこと好きみたいで』

美希の言葉を思い出す。まさかと頭をふつてみた。

「荊野、こんなところに隠れていたか」

突然、小泉先生の声が出て、真吾は後ろからえりをつかまれた。

「せ、先生、図書室です。お静かに」

「だまれ。次期エースが部活さぼっていいと思ってるのか。こい、特訓だ」

「ひええええ。助けてー」

真吾がひっぱられていく。三人は、同時にふき出した。秋の日差しがマド^オからさしこみ、図書室は

3

注 真摯……まじめでひたむきな様子。

——『13歳のシーズン』あさのあつこ より——

問一——線①「昨日はおそくまでかかって、文化祭の準備をしていたのだ」とありますが、「文化祭の準備」とはどのようなことですか。だれが、どこで、何を、どのように、どうしたのかがわかるように、答えなさい。

問二——線②「驚きだった。楽しくもあつた」とありますが、どのようなことに「驚き」、どのようなことが「楽しくもあつた」のですか。答えなさい。

問三——線③「泣くまいと唇をかみしめている」とありますが、茉莉のどのような様子が分かりますか。次の中から、適切だと思うものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 不安のために泣きそうになるのをこらえている様子。

イ 悔しさのために泣きそうになるのをこらえている様子。

ウ こわさのために泣きそうになるのをこらえている様子。

エ 驚きのために泣きそうになるのをこらえている様子。

オ 怒りのために泣きそうになるのをこらえている様子。

問四——線④「朝の大气がひんやりとしみた。さつきまでの、心地よさはどこにもなかった」とありますが、次の設問に答えなさい。

(1) 「さつきまでの、心地よさ」が書かれている一文を文中から探し、はじめの五字をぬき出しなさい。(句読点などは一字に数えません。)

(2) その「心地よさ」がどこにも無くなってしまった理由を答えなさい。

問五——線⑤「深雪はだまって教室を出た」とありますが、深雪は何のために教室を出たのですか。説明しなさい。

問六——線⑥「あたし、見たのよ。栗坂さんが今朝早く、教室から出て行くところ」とありますが、ここに用いられている表現法を何といますか。次から選び、記号で答えなさい。

ア 擬人法 イ 比喩 ウ 倒置法 エ 省略法

問七——線⑦「こぶしを握り締めると手のひらが汗ばんでいた」とありますが、この時の深雪の気持ちの説明しなさい。

問八——線⑧「気がついたら……」とありますが、「……」の後に言葉が続けるとしたらどのようなようになりますか。具体的に答えなさい。

問九 — 線⑨「うつむいていた菜里が、顔をあげた」とありますが、真吾が言った「年表作成第二弾」という案に対して、菜里はどのような気持ちになったでしょうか。解答らんに合うように、適切な二字の言葉を答えなさい。

問十 — 線⑩「みんな、かつこいい」とありますが、深雪はなぜ「かつこいい」と思ったのですか。説明しなさい。

問十一 文中の 1 . 2 に入る言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もごもご イ ずんずん ウ もじもじ エ さらさら オ ばたばた

問十二 文中の 3 に入る表現として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 静けさに包まれた イ うす暗くなっていた ウ 光にあふれていた
エ 冷え冷えとしてきた オ 蒸し暑くなっていた カ にぎやかになってきた

問十三 — 線アの漢字には読みがなをひらがなで書き、イ・ウ・エ・オのカタカナは漢字に直しなさい。

二

次の — 線のカタカナを適切な漢字に直しなさい。ただし、ア、イを同じ解答にしてはいけません。

① ア アタタかい気候になる。

イ アタタかい料理を出す。

② ア J Rと私鉄がヘイコウして走っている。

イ 二つの直線がヘイコウする。

③ ア シュウカン誌を読む。

イ 早起きのシュウカンを身につける。

受 験 番 号

氏 名

得 点

—

--

問 一

問 二

問 三

問 四	
(2)	(1)

問 五

問 六

問 七

問 八

問 九

「年表作成第二弾」という案に

する気持ち。

問 十

問 十一

1

2

問 十二

問 十 三			
エ		ア	
れた	アラ ワ		口
			調
オ		イ	
	マ ド		テ イ ア ン
			ウ
			ガ ツ シ ヨ ウ

二

①
ア
イ
②
ア
イ

③
ア
イ